

尊敬する 村上幹雄先生



岩見沢市医師会
ささえるクリニック岩見沢

永 森 克 志

私が尊敬する医師は、当法人（医療法人社団ささえる医療研究所）の最年長87歳の村上幹雄先生です。幹雄先生は旭川の医師会でも最年長、今もなお現役です。村上内科小児科医院で毎日、午前外来、午後訪問診療を行っています。

幹雄先生は熊本大学医学部出身ですが、満州で過ごした幼少期のさまざまな思い、戦争体験もあり、北海道に渡り、北海道大学の医局に属して、地域医療を支える献身的な医師となり、数年ごとに北海道の片田舎をドサ回りしていました。

当時の医師たちが身を粉にして、自身と家族を犠牲にしてでも、地域医療を支えていたことには、私たちが地域の人も改めて感謝しないといけないなと思っています。

その後の過酷なドサ回りで幹雄先生は体を壊す大病をし、静養のために大学を離れることになりました。息子3人を食べさせるためにも、しっかりとした教育を受けさせるためにも、都市部での開業を決意しました。知り合いを頼って、旭川駅から一駅先の神楽岡駅周辺という当時の新興住宅地エリアで村上内科小児科医院を開業しました。

以来50年間、『いつでも連絡していいから、我慢するんじゃないよ』という赤ひげ先生として、ずっと神楽岡地域を支えています。

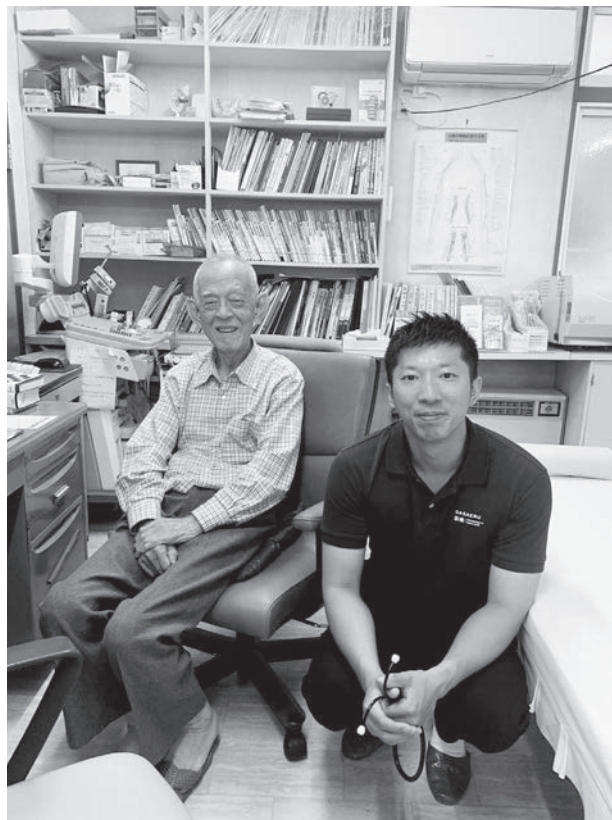
先日、大病院から村上医院に紹介され、退院して自宅に訪問診療をしていた患者さんがいました。農家で地元の名士の方でした。たくさんのお友達や仕事仲間、遠方に住んでいる息子さんたちと全員に笑顔で会えました。ご本人が大好きなたくさんの人に見守られ、ご本人のご希望通り、病院に戻ることなく最期まで自宅で過ごすことができ、穏やかなお看取りとなりました。自宅でのお看取りは不安だったご家族の方から「自宅での看取りがこんなに幸せな最期だと思いませんでした。痛みもなく苦しまずにスッと亡くなりました。入院中から家に帰したいと思っていたけど、家で見てくれる信頼できる先生がいなくて諦めかけていました。だから、村上幹雄先生には本当に感謝しています。できれば、もっと早くお会いしたかったです。それでも、家族一同の不安を取り除いてくれたうえに、本人の最後の希望を叶えてくれた幹雄先生には本当に感謝いたします」と話がありました。

また、ある日の話です。外来が終わる頃、往診依頼の電話が鳴りました。村上医院がかかりつけの男

性から、奥さんが転倒して動けなくなった、奥さんはかかりつけ医はないので困っている、という内容でした。「奥さんはうちの患者さんじゃないけど、神楽岡の住人じゃないか。時間外だけど、困っているなら行こう」という幹雄先生の一声で、事務も看護師も医師も全員で往診となりました。診察の結果はA型インフルエンザで、ベッドで寝て動けなくなっていました。トイレにも行くことができなくなっていたので、ベッド上は汗と排泄物で大変な状況でした。大柄な方で、旦那さんだけではどうにもならないので、スタッフと、なんと幹雄先生まで一緒になってシーツ交換等の介護まで行いました。事務員は診療内容記載や身体介護補助を懸命にこなし、看護師は医師付き対応からベッドメイキング等、手慣れた作業をこなします。幹雄先生は体動時に細かく全身状態を確認します。幹雄先生の合図で、皆んなで揃って「せーの！」の掛け声で、4隅のシーツの端を持ち、隣の綺麗なベッドに移し替えました。まさに村上医院総出で、一丸となつての時間外往診対応でしたが、幹雄先生は「皆んなで一緒に患者さんと地域を支えるっていいな～。患者さんの『ありがとう』が、ご褒美だな～」と嬉しそうでした。

このように、幹雄先生はお金に頼着せず、日々勉強し、少量のいい薬を処方し、患者さんに寄り添い、患者さんの生活と地域を支える医療をずっと続けてきました。

私の今の夢は、尊敬する幹雄先生にずっと現役で働ける体制のお手伝いをし、幹雄先生が日本医師会の赤ひげ大賞を受賞することです。



87歳幹雄先生と33歳佐川先生。年の差54歳